



議長の目^{アイ}ランド



人が生活していくために必要なものと言えば先ず、空気や水、食物、住む所、電気と、一瞬で生命に係わるものから、時間が過ぎると徐々に影響の出てくるものがある。その一つに通信がある。郵便、電信、電話、パソコン等は人と人との意思の疎通を図る便利な道具だと思う。特にパソコンの普及や活用は目覚ましく、会社や個人が島外と情報のやり取りをするのに使用しているのだが、使いたいときに使えない、知りたいときに知る事ができないという状態が何年も続いている。

そこで、伝達容量が大きく処理能力の早い光ファイバーケーブルで本土と繋げば、今困っている事がほぼ解消できることになる。ここに現在の光ファイバーケーブル敷設工事の計画と進捗状況を報告します。

4ヶ年の工事計画

- | | | |
|-----|--------|---------------------|
| 第一期 | 平成28年度 | 御蔵島・神津島（工事は着工しています） |
| 第二期 | 平成29年度 | 式根島・新島 |
| 第三期 | 平成30年度 | 利島 |
| 第四期 | 平成31年度 | 青ヶ島 |

となっているが、結果が出るまでは何が起きおるかわからない。豊洲市場の例もあるので完全に完成するまでは今後も村と共同して国と東京都に陳情要望していきます。

公共施設再見

第2回 新島村養殖場施設（下）

7月上旬、議員は養殖場を訪れ、現場を管理する宮川昇士氏（平成13年から現職）から直接、話を伺った。

まず現状をざっと概観するとA池のイケス6基にはそれぞれ採卵用の親真鯛50～60尾、天然真鯛24尾、平成26年度仕込んだ真鯛2,800尾（来年度出荷予定）が入っていて、2基が空いている。現在コンテナハウス内で育成している稚魚が一定の大きさに成長したら、空いているイケスに移す手はずとなる（11月現在、イケスには5,000尾の幼魚が移されている）。

平成24年度、25年度の2ヵ年、真鯛の種苗生産が村の方針でストップしたことで、現在の養殖魚の生産に大きく響いている、と残念そうに話していた。

どうも村側に養殖場の運営に一貫した明確な方針がないような、そんな疑念を生じさせるエピソードに聞こえる。

B池の3基のうち、2基には昨年仕込んだシマアジが1,500尾、真アジ2,000尾が入っていて、真アジは400～500gの大きさにして築地に出荷する予定とのこと（真アジは11月中に出荷し、シマアジは来年度になる）。

氏のこれまでの経験から真鯛の養殖が島の自然環境のサイクルに一番適しているそうだ。このため今後は真鯛の品質をそろえ、毎年2,000尾を目途に安定的に供給できる体制にもっていきたい、そう語っていた。

しかしこれで600万円の売上げを見込んでいるということだから、経営状況にはまだまだ厳しいものがある。今年度の養殖場の運営費は1,500万円で、このうち人件費とエサ代で全体の8割を占める。赤字解消にはほど遠い。ただ夏の不漁期に民宿の利用がありアテにされていて、その点で存在感をみせている。ということは養殖場の役割としては別のアプローチも必要かもしれない。

さて、もうひとつ氏が熱心に取り組んでいる真鯛の採卵からふ化、稚魚の育成、この作業の模様を紹介したい。これまで稚魚を購入して育成していたが、これをやめて手ずから採卵から始めるというもの（稚魚の購入には不確実性やリス



真鯛の稚魚を飼育しているコンテナハウス。

クが伴っていた)。以下は真鯛に恋した男の“養殖愛”の物語。

宮川氏の前の1トン水槽（2枚目の写真を参照）には約1.5センチの真鯛の稚魚、8千尾ほどが飼育されていて、1月半かけて3センチまでに成長させ、外のイケスに移すという（当初1万粒の卵からふ化し共食いや死滅で6千～65百個に淘汰される）。この間、背後にある水槽ではエサとなるプランクトンを培養し網ですくって一定の大きさにそろえ水洗いして与え、その模様を実演して見せてくれた。手前右側のガラスの円筒の容器（画面右端にわずかに写っている）には真鯛稚魚のエサとなる動物性プランクトンを培養していて、いずれの水槽・容器には新鮮な空気を送り込むポンプが忙しく作動してアワ



ハウス内の宮川氏の作業の様子。

立っていた。

この設備（コンテナハウスを含めて）は氏がほとんど無償で譲り受けたものばかりで、購入したのは水道の配管ぐらいとか。とにかく技術も設備も無の状態から手探りで始め、専門家に教えを乞い、器具をも

らい受け、どうにか採卵から稚魚を育て成魚とするまでの一貫養殖にやっと手応えを感じてきたという。

養殖場の日課は、朝8時に出勤すると池の海水の状態をチェックする。水温・塩分濃度・溶存酸素を測定し、イケスの点検をして弱っている魚は外へ出し、死魚は処分する。続いて事務所に入り東京の常連の店などに注文品の発送手続き、他の注文品を整理し、午後から配達となる。

イケスの管理は9時半からB池のシマアジ、真アジにエサをやり、A池の鯛は午後から。これは魚種によって食べ頃の時間帯が異なることによる。エサは経済性・効率性からドライペレットを使っている。魚の肉質はクセがなく自然魚と遜色ないとのこと。このような作業のあい間にも常にコンテナ小屋の真鯛の稚魚の成育状況、エサのプランクトンに目を光らせ、パソコンにデータを入力し、ともかく相手が生き物なので気が抜けないとため息混じりに話していた。最後に販売台帳、日々給餌表、水質管理表などの日報をつけてとりあえずの一日が終わる。

こうして見ていくと大変な仕事の割には、あまり報われていないな、という印象を持つ。叶うことならこの養殖事業が花開くことを祈りたいが、どんなものか。やはり村が積極的に動いて、少なくとも現在の生殺しとも言える中途半端な使い方はやめて、新たなアプローチや価値観を付与して養殖場の将来像を明確にすべきではないのか。

それにしても現場で頑張っている宮川氏の熱き思い、ほとぼしるエネルギーに圧倒されっぱなしの今日の取材ではあった。